自治省の悪臣

雪　柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自治省の悪臣

【Ｎコード】
Ｎ９３４０Ｚ

【作者名】
雪　柳

【あらすじ】
ファネ国自治省に新たな政務次官がやって来た！
アギール伯爵令嬢２６歳。金茶の髪に黄緑の瞳の美姫。
仕事熱心な若き官僚は日夜苦悩する…名のれば十中八九
「あのアギール家！？」と問い返される日々にうんざり。
何しろ彼女の両親は国内のみならず周辺諸国にまで
名の知られた超・有名カップルなのだ。
伯爵令息であった父と子爵令嬢であった母は幼馴染の許嫁同士。
そのままゆけば周囲から祝福されてゴールインのところ、

時の王女が伯爵令息を熱愛、時の王子が子爵令嬢を偏愛するに
至り、まさかの破局の危機。
しかし二人は、王家の完全包囲網を辛くも突破、
隣国まで逃れて駆け落ち婚するという快挙？暴挙？に出た！
これは一方では“世紀のロマンス”ともて囃され（↑主に平民から）
、
他方では“世紀のバカップル”と非難され（↑主に貴族から）た
鴛鴦夫婦の一粒種の物語。

序章　自治省の新人次官（前書き）

初投稿。
伯爵令嬢、でも庶民育ちのリアンが仕事に、恋愛に、と奮闘する物語。
全１０話完結（予定）。

序章　自治省の新人次官

年の暮れ。灰色の空に粉雪舞う、何となく重苦しくて憂鬱な冬の日。

ファネ国自治省では異例の人事が行われた。

一週間前に急死した政務次官に代わる後継者が任命されたのだ。

その人は正午の少し前に、自治省役人一同へお披露目となった。

省内の大会議室には当直や出張中の者を除いた全員が招集された。

数は百名ほど。室内が熱気を帯びるのは、混雑のためばかりではない。

誰しもが異例の人事で余所から抜擢された若き官僚に興味津々なのだ…

何しろ新しく来る次官は若い女性、いやそれはともかく、

やって来たのは“あのアギール家の”伯爵令嬢なのだ。

「新任のリアン・パルマローザ・アギール君です。中途半端な時期の登用となりましたが、政務次官を欠員にしておく訳にはいきませんので、陛下と相談して急ぎ人選しました。地方役人の経験あり、隣国イサへの留学経験あり、と実力派の方と聞いています。　一同、力を合わせ、この自治省を盛り立ててください」

優しげな口調で、しかし当たりさわりのない紹介をしているのは自治省

長官キリルである。

まだ三十前であろう若き青年が長官をしているのはその出自ゆえ。

醸し出す雰囲気が高貴で所作の一つ一つが洗練されているのも当然で、
現国王の叔父君にあたる正真正銘の王族出身者だ。
今は臣籍に降り、ミルケーネ公爵を襲名している。

しかし、自治省役人にとって目下の関心は長官に対してではない。
その傍ら、半歩下がった位置に控えめに立つ人物。

「ただ今、ご紹介にあずかりましたリアンです。地方行政の充実と基盤
整備に精一杯つとめたいと存じます。
皆さま、どうぞよろしくお願い申し上げます」

（あれが…）（あのアギール伯爵令息とあのフェヌイ子爵令嬢の娘…）
（今は亡きリウカ王女を袖にした男の…）
（ワグナ殿下を振り切った女の…）

好奇心むき出しだが、意外に悪意がこもっていないのは、自治省役人の
多くが下級貴族もしくは平民出身であろうからか。
新人次官を迎えるだけにしては熱すぎる視線がリアンに注がれる。

なかなかの美姫…誰もがそう思った。
緊張からであろうか、ぎこちない微笑みを浮かべつつ、
丁寧に頭を下げた新任次官。
伯爵令嬢でありながら黄緑色の瞳には少しも威張った様子がない。
金茶の髪はすっきりと頭の後ろで団子状にまとめられている。
王族出身のキリルと並んでも少しも見劣りしない。
黒髪に藍色の瞳をもつ長官とは色彩的に合わないかもしれないが、

美男美女の一対なのは間違いない。
下級役人の何人かは早くも長官と次官のロマンスを妄想した。
しかし、キリルの引き際は早かった。
「それでは後のことはヴァンサランに頼みます」
扉の前に立っていた側近に声をかけ、新人次官に二言三言ばかり何か
囁くと、長官はさっさと大会議室を後にしてしまった。
（（（そうだった…））））
あっという間に姿を消した長官に、部下一同は声なき声でつぶやく。
王族出身大貴族が要職につくのは珍しいことではないが、
その実、名ばかりのことなのだ。

自治省長官の優雅な、といえば聞こえが良いが、
ぐうたらな暮らしぶりは　結構下級役人にまで知られていた。
「それでは皆さんお疲れ～昼飯にしてくれや」
ざっくばらんに声がけすのは、赤毛の大男。官吏というより剣闘士、
という体型だが、立派に自治省役人である。それも事務局長。
長官と政務次官を補佐する高官の一人だ。
「あ、その前に」
新人次官に個別挨拶しようとする者と食堂に向かおうとする者で
人の流れができる前に、待ったがかかった。
リアンの手にはいつの間にか紙の束が握られている。

「簡単なアンケートにご協力ください。
お昼前にあまりお引き留めしてもいけないので、制限時間は１０分。
書きあがった方から退出していただいて結構です。
今から私語厳禁ということでスタートしてください」

アンケート用紙があっという間に配布され、よく見れば筆記用具も会議室の四方に寄せられたテーブルの上に配置されている。
ヴァンサランが何か言いたげな視線を向けてきたが、
リアンはそれをさらりと流して、アンケート回収箱を彼に渡した。
変な時期の就任なので、少しでも早く正確な状況認識がしたくて、
よろしくお願いしますね、などとゴニョゴニョ述べながら、新任次官は
自治省役人一同の間を縫うように歩き回る。
仕事熱心な人なのだな、と一応は好意的に受け止められたものの、
アンケートの中身を見るや、その場の大半がビシリと
固まることとなった。

熱気を帯びた室内が一転、何やら冷たい汗が背中を伝うのは、
十人二十人ではない…実際のところ半数以上だ。
（（（…これは））））
新人次官の就任直後、アンケートという名の抜き打ちテストが
彼らを待っていたのだ。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

バーンと執務室のテーブルが派手に叩かれた。赤インクのペンが吹き
飛び、書類数枚が絨毯の上をハラハラと舞う。

黄緑色の目を吊り上げ、フルフルと拳を震わすのは、年の暮れに就任
した自治省の新人次官リアンである。
「なんで、こんなに、ド阿呆ばかりなんだっ！
この役所ってどうなってんの！」
怒りの矛先は自然、補佐官であるヴァンサランに向けられる。
「いや、でもよ、正直どこもこんなもんだぜ…
俺としては平均正答率４７％っていうのは、　むしろ
“良くがんばりました”ってトコ。
みんな半分くらいは書けていたってことだろ」
「自治省の役人のくせに、ファネ国１６州が全部書けないってどうなの？
初等教育レベルでしょうに。
でもって長官の趣味を書けという設問に　“全国各地の地酒取集”と
回答した人９８％。これって正解なの？正解にして良いの？
それから本年度各州に分配される特別予算の総額を書く設問は正答率７％
…ふざけてんの？省内教育ちゃんとやってんの？」
沸々と血圧が上がってくるのが自分でもわかる。
リアンは就任初日から自治省の厳しい現実にさらされることになった。
ファネ国中央官庁の中で、花形官職と言われるのは財務省や内務省であり、自然そちらには権力志向が強い者が集う。
自治省や工部省はどちらかというと地味なイメージだが、
それでも国家予算の振り分けが大きく、地方に与える影響力が絶

大だ。
（そこの役人がまさかの無能ぞろい？いや、州の名前全部言えなくても、
特別予算額　知らなくても　政務はできるのか？
いやいやいや、ありえない、落ち着け私）
内心激しく動揺しつつ、リアンは何とか自分を抑えこんで能面を被ろうとした。
目の前のヴァンサランは気さくな人物だが、なんといっても
「長官側」の人間　なのだ。
事前情報としてリアンは彼の養父がミルケーネ公爵の肩書を持つキリルの執事をしていることを突き止めていた。
ここで醜態を見せれば、後で何と長官に報告されるか
知れたものではない。

（仕事熱心なのもいいけど、ほどほどにね、リアン）
不意に、長官が退出間際に耳打ちした言葉が甦ってきた。
熱い吐息が耳朶にかかり、肩ほどに束ねられた黒髪がほんの少しリアンの頬に触れた、その一瞬。
自分より少しだけ年上と思われる若い長官の何気ない仕草に、ドキリとした。　絶対オモテには出していない自信があるけれど。

（あれって計算してやっているなら結構ヤバい長官だよな。
でも、計算しないで　やっているならもっと面倒な気も…）
就任挨拶のために初めて長官室に足を踏み入れた時、リアンは悟った。
この長官は仕事をする気が全くないのだ、と。
そこは仕事部屋ではなく、大貴族の豪奢なサロンのようだったからだ。
そして握手のために差し出された右手は白絹のように白磁のように滑らかで透けるほど美しかった。

（働かない人の手ですね…）と、心の中だけで彼を咎(とが)めた。
しかしながら、単なるグータラ大貴族と決めつけるのは早計だ。
リアンはなぜかあの優しそうな雰囲気の裏に静かな計算があるような
気がしてならない。

「で、明日から何か改善策出すんですか、リアン？」
トントンと机の端でアンケート用紙をそろえながら、ヴァンサランが
声をかける。
礼儀にうるさい連中が周りにいる場合を除いて、
敬称抜きで呼び合うことを二人は初対面の時に決めていた。
リアンの方が上官だが、自治省での経験値はヴァンサランの方が
上だ。

「…そうだな、明日から鬼の政務次官の呼ばれるよう、
務めるようにする」
間違っても“アギール家の伯爵令嬢”などという間抜けな呼称で
はなく、
と言外にリアンは告げた。

序章　自治省の新人次官（後書き）

両親は駆け落ち婚。大ハッピーエンドのその果てに。
一人娘のリアンはイロイロなツケを払わされることになります。
しかしそこは逞しい彼女のこと。
あまり心配せずに暖かく見守ってくだされば何よりです。

第一章　自治省の有閑長官（前書き）

今の時代、こんな長官いたら袋叩きになるでしょうね…
高給取りのくせに、仕事をほとんどしないで遊んでいるのですから。
しかし一方では、こんな優雅な生活をちょっぴり体験してみたいものです。

第一章　自治省の有閑長官

ファネ国王都キサラ。
北辺に聳えるカプレス山脈を背負うように王府が築かれている。
中央省庁の多くは王府南面にある建物群のに集中している。
自治省は南東門からほど近い旧称カリン宮の東棟に在り、
同じ宮の中央棟には商務省、西棟には工部省が入っている。

４階建ての建物の最上階、東棟中央にバルコニーを抱えた
豪奢な部屋が自治省長官キリルの執務室である。
王族出身、現国王の叔父君、そしてミルケーネ公爵である青年。

彼のために用意された部屋は、工部省長官と商務省長官のそれとは
明らかに…誰が見てもそれと分かるほどに、格が違っていた。
一応キリル以外の二人の長官室も各棟の最上階に位置している
のだが、その規模はずっと小さい。

自治省長官室にのみ言えること。
調度品の多くは繊細な彫刻が施された黒檀づくり。
寄木細工の床をほとんど隠してしまっているのは、
高山地方の穢れなき乙女が１０年以上かけて織るという厚手の絨毯。

毎日公爵家から執事が銀器を磨きにくる。
毎日公爵家から専属の庭師が新しい花を活けにくる。
長官のためだけに用意された侍女２名、調理師１名。
…要するに役所の仕事部屋ではなく、大貴族様のサロンなのだ。

「リアン、君の好きなようにしたら良いよ」
ヴァンサランを伴い、朝一番にやって来たリアンに長官はあっさり

承諾の意を示した。
朝一番というのは、キリルが自治省でその日最初に面談した人物
という意味で、その実、正午に近い。

リアンは就任二日目にして誰よりも早く来省し、バリバリ仕事をこなしていたが、若き公爵サマは予想を“裏切らず”、重役出勤であった。

「ええと、提案書をきちんとご覧いただけましたか？
よろしければ本日午後からでも実行に移したいのですが」
昨日のアンケート、もとい、抜き打ちテストと、幹部のみが閲覧できる
人事調書を参考にして、リアンは少しばかり自治省内の組織を動かして
みることにした。
長官に手渡した提案書にはその具体的プランがまとめられている。
一応、キリルは最初の頁から最後の頁までパラパラと目を通した。
１頁、１秒。

それで内容把握ができるなら、あんたはどんだけ天才なんだ、と
リアンは心中穏やかではない。

提案書はあっという間に彼女の手に戻ってきた。
末尾に長官のサイン（それだけで芸術のような筆跡！）と
角印（宝石としても十分通用する等級の翡翠製だ！）が付されて。

「さて、少し早いがお昼にしましょうか。リアン、そちらにどうぞ。
サラン、君も一緒に食べよう」
リアンの言葉を待たず、キリルが銀の呼び鈴を一つ鳴らす。
たちまち二人の侍女が現われた。

一礼するや二人は息のあった所作で中央に置かれた長テーブルに
レース編みのクロスをかけ、銀食器を並べてゆく。
クロスにも銀食器にも公爵家の紋が入っている。
一応、自治省の紋が入った高官用の食器もあるはずなのだが。

（ああ、このお貴族様め～）
リアンは作り笑いを浮かべるのも嫌になった。
彼女とて貴族出身、まごうかたなきアギール伯爵令嬢である。
しかし、両親が駆け落ち婚をした煽りをもろに喰らい、
その人生のほとんどは庶民暮らしであった。

政務次官就任のために不本意にも貴族の肩書を持ち出す
ことになってしまったが、彼女に伯爵令嬢としての自覚は
皆無である。

（午前中にした仕事が書類1件の決裁だけって、どうなのっ）
リアンは目だけでをヴァンサランに問うた。
彼は肩をすくめただけで何も言わない。

キリルは瞳の色に近い藍色の服を好んで着るようだった。
上着はだらしない…とまではゆかないが、かなりゆったりと
銀糸の入った帯で結ばれている。

肩までの黒髪は藍糸と銀糸を撚った組み紐でまとめられていた。
およそ仕事向きの装束ではないが、王族出身の若様には
よく似合う。しかし見とれている場合ではない。

「長官、せっかくのお誘いですが、就任したばかりでまだ立て
込んでおりますので。昼食会はまた後日にでも。
サラン、行こう」

リアンは不遜にも公爵サマのお誘いを断って踵をかえした。
ヴァンサランは侍女の手にした籠からひょいひょいと
幾つかパンをつまんで抱え込むと、リアンの後を追う。

「リアン」
挨拶もそこそこに、ほとんど逃げるように部屋を出ようとした彼女を
キリルは呼び止めた。

厚手の絨毯が敷かれた床は靴音を消してしまう。
ゆったりと羽織られた上着の衣擦れの音だけが微かに響いて、
あっという間に、長官が目の前に立っていた。

そのまま少し前かがみになるようにして、リアンの目線と同じ高さに、
顔を近づけてくる。

（いや～っ。近い、近い…なんなの、このヒト）
昼の光を浴びて、藍色の瞳が輝く。底知れぬ煌めきを湛えて。
どこまで意識的にやっているのか、まだ読みきれないが、
自分の美貌が女性全般に及ぼす効果を熟知しているに違いない。

「リアン、政務次官として貴女がやるべきと信じることをやりなさい。
　でも、約束なさい、仕事のために自分の命を危険にさらさないと」
「は、い、長官」
必死の能面顔も保てなくなり、リアンは何とか返事をした。

「それから、私のことは官職名ではなく、名前で呼んでください。
　歳も近いですし、堅苦しいのは抜きにしましょう」
仲良くしましょうね、そう小さく付け加え…

何と公爵サマはその白絹の手でリアンの頭を撫でたのである！

（ぎゃぁあ～やめて、何これ、セクハラ？パワハラ？）

昨夜も今朝も時間なくて、洗髪していないのにーっとどうでも良いこと

まで思い浮かべて、動揺激しい新米次官。

しかし彼女はすばやく立ち直った。

「長官を名前で呼ぶなど、とんでもございません。

恐れ多いことにございます。

それではこれにて、御前失礼いたしますっ」

ヴァンサランがすぐ横でひどく面白そうに若き長官と若き次官を交互に見比べていた。

しかし、リアンにはそんな補佐官の様子に気づく余裕はなかった。

繰り返すが、リアンは庶民育ちである。

１８の歳より４年間、地方都市ルーマで下級役人を経験している。

その後、州の奨学金を得て、２年館、隣国イサへ留学している。

つまりは一般的な貴族の箱入り娘に比べれば、人間関係の上で相当鍛えられているのだ。

男女の関係もそれなりに…まぁ、豊かとは言えないものの、

深窓の姫君に比べればずっと経験値があるはずだ。

王族出身とはいえ、身にまとう高貴さに中てられたとはいえ、、

ぐうたら長官にドキドキするはずなど、断じてないのだ！

「サラン、長官っていつもああなの？」

ヴァンサランが長官室から要領よく持ち出したパンを受け取ると、

白いハンカチで包んで袋状にして、階下に運ぶ。

昼食をとりに行く時間がほとんどないのを察したのか、
赤毛の大男は意外によく気のつく、優秀な補佐官である。

「ああって？」
「…天然タラシ」
「お姫さまが使う言葉じゃねーな」
「お姫さまじゃないから、私。知っていると思うけど」

「長官はどちらかというと女嫌い、いいや、人間嫌いな方だと
思うよ…」
どう説明したらいいのか、ヴァンサランは困った。
別に口止めされているわけではないのだが、リアンのことを
相当気にかけていることを今この時点で言うべきかどうか。

キリルがリアンに対したこの二日間。
ヴァンサランを補佐官として直近の部下に配したこと。
自分から手を差し出してまで、リアンと握手したこと。
耳朶に唇が触れそうなほど近づいて、何か囁いたこと。
官職名ではなく、名前で呼ぶように頼んだこと。
危ないことはするなと言って、頭を撫でたこと。

一見すると何気ない言動のようで、しかし、だ。
長官の本性をよく知るヴァルサランにとっては、そのどれ一つを
とっても「ありえね～」「誰だこいつ～」という事態である。

実はあの人、いろいろ難しい人なんですよ～気を付けてくださいね、
と正直に警告するわけにもいかず、ヴァンサランは口をつぐんだ。
それを見て、リアンは、やっぱり彼は「長官側の人」だ、と思い
パンの一件で下げられた警戒度数をまた少し戻すことにした。

（負けるな、私…）
階下の自室に向かってリアンは走った。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

午後の優雅なひととき。
自治省長官は客人と差し向かいに座って、香茶を飲んでいた。
場所は、中央バルコニーに設けられたサンルーム。
ミルケーネ公爵と彼の迎える客人にのみ許された特別な場所である。

「例の娘がめでたく自治省に就任したそうだな。
中央での業績皆無の者を　政務次官にとは、また思い切ったことを。
陛下の弱みを何かつかんで、取引したのか」
客人は口髭をはやした中年の紳士である。
キリルと同じ癖のない黒髪は短く切りそろえられている。
やはり同じ藍色の瞳はしかし、ぐっと鋭く威圧的ですらある。
そして王府内でも帯剣を許されているのは、この男が軍人である証だ。

「…人聞きの悪い。きちんと仕事ができると思ったからこそ抜擢したのですよ」
「ふん、田舎でちょっとばかり役人をやっただけで、人を動かせるようになるものか。留学経験だって高が知れている」
「そういう貴方だって、数年前から突然、女性官吏の登用やら女性の爵位継承やらに積極的になりましたよね」
…誰か、王府に呼びたい女性でもいたのですか、キリルの目はそう問いかけている。
「私を出し抜いて、あの娘を囲いこんだつもりか…公爵」
「とんでもありません。私はただ、私の“可愛い人”がこの王府で

どれだけ自分を通せるのか見てみたいと思っただけですよ」
そのために少々お膳だてしただけです、とキリルはいたずらをした子どものような顔をした。それを見て客人は苦笑する。
「お会いになりますか？ここにお呼びしてもいいですよ」
「いらん。会いたい時は自分で会いに行く。お前の指図も受けん」
客人は大げさなことを嫌い、非常用の隠し通路を使って自治省長官室を訪ねていた。
したがって、彼の来訪をリアンを含む階下の人間は誰も知らない。
「先ほど、隠し窓から少しばかり観察させもらった。
政務次官付の数名を凄い勢いで叱り飛ばしていたぞ
…あれはとんでもないジャジャ馬だな」
「とかく地味な自治省もここに来て活気づきそうですね」
「黄緑の、ペリドットの瞳が…“あの人”と一緒だった」
客人から遠い昔を懐かしむ、愛おしくも切なくなるような声が漏れた。
キリルは香茶を口に含むふりをして、しばし沈黙する。
相手が「あの人」のことを語り始めたら下手に追及してはならない…過去から学んだ教訓だ。
「だが、金茶のくせ毛はあの男譲りか。
気に食わないな、どうしてくれようか」
客人の表情が一転、憎しみの色が暗く激しく浮かび上がる。
腰に佩いた剣で金茶の髪を首ごと落としかねない勢いだ。
しかし、彼にあの娘は殺せない…キリルはそう確信している。
「殿下、私の“可愛い人”をいじめるのも大概にしてくださいね」

「お前の指図は受けんと言っているだろう。
第一、　お前のモノじゃない」
「さて、私たちは敵同士ではないはずなんですがね」
…ここでいがみあうのは得策ではないですよ。
客人の空になったカップに手ずから香茶を注ぎながら、
自治省長官は心とろかすような笑みを浮かべた。

第一章　自治省の有閑長官（後書き）

キリル長官の“可愛い人”と客人の“あの人”。なんかビミョーです。
客人が何者かは第3章で出てきます。ひげ面軍人のおっさんですが、準主役級の方です。
ちなみに二人が飲んでいた「香茶」は紅茶に数種の薔薇の花びらを合わせた
公爵家オリジナル・ブレンドです。もちろん茶畑も薔薇園も領地にあります。

第二章　自治省の美貌小姑　その１（前書き）

年の代わる前に何とか更新を…
急いでうどんを食べて（我が家はなぜかそばではなくうどん）、
年内すべりこみを目指しました。
が、アギール家ほのぼの話を挿入したらちょっと長くなってしまいましたので
２回にわけます。

第二章　自治省の美貌小姑　その１

自治省政務次官の朝は早い。日が昇る前に起床して、身支度を始める。
就任して一週間が経つが、まだ一度も王都内にあるアギールの屋敷に帰っていない。
祖父であるアギール伯ハリドと叔父にあたるシャイン子爵クロンには「ごめーん、一カ月は帰らないから許してね」と先に謝ってある。
二人は年末年始をリアンと過ごせないことを、とても、とても残念がり…
「おじいちゃんと一緒にジャオズを食べてくれないなんて」
「おじちゃんと一緒にショウコ酒を飲んでくれないなんて」
と終いには泣き落としにかかったが、リアンの心は変わらなかった。
ちなみに、ジャオズというのは、小麦粉をこねたものに肉野菜を包んで
蒸した料理だ。
リアンが隣国イサに留学していた時に習ったもので、
なんでも極東にある一大帝国の名物料理、特に正月に好んで食されるもの
らしい。
ショウコ酒というのも同じ国の特産で、琥珀色をして芳醇な酒だ。
隣国イサはファネ国以上の国際都市で、リアンは滞在２年の間に随分と
世界の美酒美食を堪能した…もっとも大衆料理・安酒限定であったが。

王都に来たばかりの頃、「おじいちゃんに」に手ずからジャオズを作って
ご馳走したら、大変なことになった。
長く離れ離れに暮らしていた孫娘の心づくしに祖父ハリドはいたく感動し、
涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、ジャオズを頬張ったのだ。
その後すぐ盛大にむせて、さらに騒ぎが大きくなった。

庶民暮らしで自活能力が備わったリアンを逆に不憫がり、祖父も叔父も
とことん彼女に甘かった…嬉しい反面、過剰な家族愛はちょっと面倒くさい。
くれぐれも役所に顔を出してくれるなと釘を刺しておいたが、
いつまで保つか。

直接出向かぬ代わりとばかり、日に三度、やれ弁当だ、菓子だ、着替えだと
召使いに差し入れを届けさせている。
（どこの令嬢だよ…あ、伯爵令嬢なんだっけ）
というボケとツッコミをリアンは一日数回脳内で展開している。

実はファネ国の中央官庁は４日間の冬季一斉休業に入っていた。
大晦日と正月三日はどの役所もお休みで、緊急事態に対応するための
当直がごく数名日替わりで詰めているほかは、どこも閑散としている。
自治省にしても通常であれば１５０名ほどいる人員が、休業期間中は
二割に満たない。

リアンは政務次官として休暇中であっても

“非常時に直ちに駆けつけられる場所”にいることを求められるが、省内にずっと詰めていなければなるぬ義務はない。
本来は王都内にあるアギール伯邸に待機していれば十分なのである。

何しろ、アギール伯邸と王府はそう離れていない。
徒歩であれば1時間以上かかってしまうだろうが、車を使えば１０数分で済む。

近距離にもかかわらず、祖父と叔父の懇願を蹴ってまで自治省に居座るリアン。

…「地方行政の充実と基盤整備に精一杯つとめたいと存じます」
就任演説で述べた言葉は嘘ではない。
彼女は省内に設けられた参考資料室と自分の執務室を行ったり来たりしながら、猛烈な勢いで過去の報告書を頭に叩き込んでいた。

一朝一夕で何がどうなるというものではない。
けれども、ファネ１６州が全部言えないような自治省役人がありえないように、
省内の仕事がどう回っているか知らない政務次官というのもありえない。
…まぁ約1名、何もしないのが仕事と豪語しそうな上役がいるにはいるが。

ひと気のない役所で、だからリアンは少しでも役職に相応しい人物になろうと
独り努力する。
…それともう一つ。リアンが何とか解きたいと思っている謎。
（私を政務次官に任命したのは一体誰…？）

２６歳の…貴族としては行き遅れの女。
地方都市でたかが４年、下級役人をやっただけの。
隣国イサにただか２年、留学していただけの。
“世紀のロマンス”カップルの娘だからどうだというのだ。
いきなり中央官庁の一つで、長官に次ぐナンバー２なんてありえない。
（そんな無茶な人事がなぜ通った？誰が賛同した？何のために？）
リアンが地方都市ルーマで下級役人をするようになった頃から度々せめて彼女だけでも王都に戻ってくるよう、親戚一同から懇願されていた。
２年前に、とある悲劇が彼女を襲って以後は、その声がますます大きく
なった。
しかし、彼女が最終的に折れたのは、祖父の、
（自治省に欠員が出たようだよ…少し中央で働いてみないかい？）
という誘いだった。

その時は、下級職だと思っていたのだが。
来省初日にキリル長官から手渡されたのは「政務次官」の記章。
祖父はたぶん騙された。リアンは何かウラがあると感じつつ、この話に乗った。
どんなウラがあろうと。
（私は私のやるべきと思うことをやるだけなのだから…）

始まりの月、三の日。官公庁仕事始めを明日に控えて。
政務次官の執務室を書類の山で埋めながら、リアンは苛々し始めていた。
彼女が本当に見たいと思うものは出てこない。自由に動ける時間は

残り少ないのに。

そこに躊躇いがちに扉を叩く音がする。
就任数日目にして、新人次官は早くも自治省の過半数から恐れられるよう
になっていた。
「次官殿、お客さまです…」
運悪く本日の当直となった役人が、おずおず顔を出すや来客を告げた。

「この時期に…？」
冬季休業期間中である。緊急時ではない限り、客は来ないはずだが。

「シャララ王妃の女官が書状を持ってお見えになっています」
「王妃様の…？」
伯爵令嬢とはいえ、２６年間の人生の中、王族との接触は皆無であった。
しかし、王妃付き女官という一点でリアンの脳裏に閃くものがある。

叔父クロンの警告。
自治省就任するや時をおかずに現れるであろう要注意人物が
二名いることを予め告げられていた。
その内の一人が王妃付きの女官。

「どなた…？」
なにくわぬ顔で問いながら、リアンの頭の中にはすでに相手の名前が浮かび
上がっていた。
「フッサール伯爵夫人フローネさ…」
「…わたくしをいつまで待たせるつもりなのっ！」

当直役人が言い終える前に、派手に扉が開け放たれる。
現れたのは正統派美女。

波うつは金の髪。薄紫の瞳。白磁の肌。桜色の爪。
唇には珊瑚色の口紅が乗せられているが、化粧自体はごく控えめ。
それは逆に化粧をする必要のない美貌ゆえ。

女官にはそれぞれ仕える主人と官位に応じて定められた制服があるが
本日は私服にてご登場。
濃紫の絹地にふんだんに金糸を施した
…恐ろしく派手なドレスを「自然に」着こなしてしまっている。

（出たな要注意人物その1…）
そんな内心を綺麗に隠し、リアンは右手を胸に当てて、正式な礼をとった。
官位は政務次官の方が上だが、王妃様の書状を携えた女官に対して礼を
欠いてはならない。そのまま、上座の席に案内する。

当直役人は役目を果たすやあっという間にいなくなった。

女官が腰を下ろすと、リアンも真向いに坐した。
睨みつけるようなヴァイオレットの瞳に感情を消したペリドットの瞳が
ぶつかる。

「…わたくしのことは、どうせあのしみったれ伯爵やくだらない子爵から
聞きおよんでいるのでしょう」
「…どなたのことを仰っているのか分かりかねますが、シャララ王

妃様付き
　女官のお一人にフッサール伯爵夫人フローネ様という方がいらっしゃる
　ことは聞き及んでいます。
むろん母君が国王陛下の姉君にあたるということも」

リウカ王女。
リアンの父クロスを派手に追いかけ回し、時の権力を振りかざして母ミアンとの中を裂こうとした張本人。
しかし、非難めいたことは一切口にしない。既に亡き御方であるゆえ。
リアンの父母が駆け落ち婚した後、王女は前国王の命令で降嫁したが、
フローネを生んで一年も経たない内に没している。

「狡賢いアギール伯爵と卑怯なシャイン子爵に、あることないことどうせ吹き込まれているでしょう。田舎育ちの娘が、いやらしいこと」
「…王妃様の書状をお渡しいただけますか」
あからさまな敵意を完全無視(スルー)して、リアンは相手に本来の用件を思い出させる。
いや、フローネ自身の目的は分かっている。リアンへの宣戦布告だ。
王妃の書状など口実に過ぎない。

「わたくしの話を聞いているのっ！」
「フッサール伯爵夫人」
この無礼者、とばかり椅子を蹴って立ち上がった女官に時を同じくして
リアンの容赦ない声が飛ぶ。
「私にはしみったれで狡賢い祖父も、くだらなくて卑怯な叔父もい

ません」
「身内の贔屓目と言うわけかしら」
「そうかもしれません。ずっと離れて暮らしていましたが“私たちは”
仲良し家族なので」
言ってしまってから、地雷を踏んだかな、と少しばかり後悔する。
案の定、フローネの薔薇色の頬が色を失った。唇がきつく噛みしめられる。

“私たちは”という部分を特別強調したつもりはない。
しかし、「貴女たちの家族とは違って」という意味にとられたことは明白だ。

「本日の3時、王妃様が非公式のお茶会を開かれます。
政務次官殿をお招きしたいとのことですので、刻限までにエリエ宮を
訪れますように」
凍るような声でフローネはそれだけ述べると、王妃の書状を卓の向こうから
こちら側に滑らせるように寄越した。
本来は手ずから渡すのが礼儀だがリアンは咎めなかった。

リアンが書状の封印を解いて中身を確認する前に、フローネは執務室から
姿を消した。登場と同様、退場も慌ただしい。

（何か…勝っちゃった？）
初対面でガチンコ対決をする気は毛頭なかったのに、やはり身内を悪く
言われて少しばかり毒を吐いてしまったらしい。

リアンはこの後に控えている“非公式のお茶会”とやらに思いめぐらして
憂鬱になった。

残念ながら、お断りするという選択肢はない。
上司との昼食会は回避できても、これは断れない。
フローネもそれを分かっていて、リアンの都合を一切聞いてこなかった。

（端的に述べると、煩い、邪魔、面倒、時間の浪費、という感じかな）
叔父クロンの人物評が甦る。
確かにフローネの登場で、午後の貴重な数時間が潰れることになった。
王妃様とお茶？恐れ多いことながら、当日いきなりとは本当に煩わしい。

（…でもあれで、本質は邪悪じゃないからさ。
まぁ、お姫様のストレス解消と思って、時々は相手してやってよ）
叔父は前半で酷評しながら、何のつもりか後半でフォローした。
（確かに…分かりやすい。あれだけ「お前が嫌い」というのを正面から
ぶつけられると、いっそ清々（すがすが）しいと言うか…
ウラがなくてかえって憎めない）
フローネが聞いたら、地獄の釜が開くほど激怒しそうなことを
リアンは悠長に考えていた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

その日の午後。
一応アイロンのかかっている礼装用の上着に改め、髪をまとめ直し、化粧を薄くのせて、リアンは訪問準備を整えた。
手にはこころばかりの贈り物を携えている。

いざ出陣、と覚悟を決めて、執務室の扉を開けたその時。

黒髪を肩に揺らし、袖も裾も長い神代の装束をまとった貴人が目の前に立っていた。

「…その恰好で行くの？」
藍色の瞳がリアンを覗き込んだ。

（…その恰好で行くんですか？）
同じ台詞を心の中だけで返した。

リアンの前に贅を尽くした衣装で現れたのはもちろん、ミルケーネ公爵。
自治省長官キリルであった。

第二章　自治省の美貌小姑　その１（後書き）

次回キリルが活躍…はともかく、ファネ国王家の人物関係が少し明らかになります。
キリルとリアンの距離は…なかなか縮まりませんね、ごめんなさい。

その２は元旦から更新予定。がんばります。

第二章　自治省の美貌小姑　その２（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

予告通り、何とか元旦に更新できました。やれやれ。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

第二章　自治省の美貌小姑　その２

ワタシの常識は世界の常識ではない、かもしれない。
ファネ王国の常識はイサ共和国の常識とは一致しない。
留学時代にそれを実感することしばしば。

しかしそれ以前に…同じファネ国人であっても。
ワタシとこの公爵様の常識は全然違う、のかもしれない。

「ええと、長官？長官も王妃様のお茶会に？」
「…誰が貴女を王妃様に紹介すると思ったのですか」

いや、冬季休業期間中なんですけど。非公式茶会なんですけど。
そして何より、今朝突然呼び出されたんですけど？
要注意人物その１の伯爵夫人に。
そういえば、胸も尻も立派だったな…と一瞬、リアンは現実逃避。

「新年を祝う晴れ着を何か持っていないのですか？」
「…そんなものありませんよ」
間合いを詰めてくるキリルが怖いわけではないのだが、
何となく一歩後退。ああ、見ているのが恥ずかしい。
似合ってますよ、似合ってますけど。
貴方は、ファネ神話に出てくる
月の神ですか、氷の神ですか、鏡の神ですか。
首に架けられているのは重そうなサファイヤ、鎖は白金（プラチナ）。
白絹の手と藍の袖の間に何やらキラキラ輝いて…水晶ですか、それ。
長官殿、貴方のお召し物と装飾品は今一体お幾らですか？

「ハリドやクロンが伯爵邸に何枚でもドレスを用意していそうですが」
「…就任以来、帰っていませんので。それに、当日の呼び出しで、非公式茶会に、“次官”が着飾ってゆくのはおかしな話です」
「…貴女はそう考えるのですね。まぁ良いでしょう」

行きますよ、ミルケーネ公爵が身を翻すと、ふわりと香の匂いが微かに聞こえた。
シダー系の常緑樹の香り。甘くない。嫌味じゃない。
冬の森の清浄な空気。

てっきり自治省の在る旧カリン宮・正面玄関から出て、中央道を北進し、
王妃のおはしますエリエ宮に向かうのかと思っていたら、
キリルが足を踏み入れたのは地下通路であった。
（これって、王族と一部の長官クラスしか使えない、というか、知らない通路なんじゃ？）
曲がりくねった通路は幾度も幾重にも枝分かれしている。
一定間隔に灯りが置かれていて視界はきくものの、案内板のようなものは全くない。
何度か曲がる内にリアンは方向がわからなくなった。

外に出なくて良い分、雪にも氷にも晒されず、コート不要で快適。
そしてたぶん、エリエ宮までの最短ルートで進んでいる。
いちいち門衛に誰何され、その度に用向きを説明する煩わしさもない。

随分と、茶会に行くための手間が軽減されている。
（これは長官に感謝しなければいけない所なのだろうけど…）
一定距離を保とうとするあまり、地下道で見失いそうになったところ、
戻って来たキリルに腕をつかまれた。
そのまま小さな子どものように手をひかれたまま、会話らしい会話もなく
目的地に向かう。

（何か気まずいよ、空気重いよ、帰りたいよ）
能面を被る努力をしつつ、傍らの麗人をちらりと見やれば、相手はなぜか
機嫌良さそうだ。王妃様の茶会が楽しみなのだろうか。

「ここからエリエ宮ですよ」
重たい石造りの門を押し開けば、眼前には螺旋階段が伸びている。
「あと少しです」
ぐるぐると、3階分だか4階分だかを上った頃に、長官がまた声をかける。
体力的には自信のあるリアンだが、ここまでで何というか、精神的に疲労した。もうお茶会やめて帰りたい。

キリルの足が止まった。彫刻が施された樫の扉の向こうから眩い光が漏れている。この向こうはもう、エリエ宮の“表”だ。
「少しお待ちなさい」
キリルの手がリアンから離れたが、ほっとする間もなかった。
そのまま首の後ろに手が伸びて、あっというまもなく金茶の髪をほどかれてしまう。
「衣服はともかく、あまりガチガチなのも野暮ですよ」

「…田舎者ですので、お構いなく」
一応反論したが、長官は聞き入れず、金茶の髪を背中に流すように手で梳くと、今度は両横の髪だけをすくって軽く編みこみ、懐から出した
髪飾りで留める。この間、ものの1分もかかっていない。
「よくお似合いですよ」
そう言われても鏡がないのでよく分からない。
手で触れてみて、なんとなく編みこみと髪飾りを感じるだけだ。
「長官…なにか手馴れていらっしゃいますね」
「…まぁ、年齢問わず女性のお相手をするのは慣れていますので」

今サラリと凄いことを言った。
リアンはどう言葉を返してよいか分からない。
しかも「年齢問わず」ってナニ？

「行きますよ」
キリルが扉を開く。眩い光に包まれて、リアンは目を伏せた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

案内された部屋はさほど広くない客間であった。
エリエ宮の中で王妃がごく私的な内輪の催しを行う際に使用する小サロンのようだ。
橙色の壁には金色の格子模様が入っているが、けして派手ではなく落ち着いた趣を醸し出している。心地よい暖かさが室内を包む。
そこかしこに王妃の趣味の良さと気配りが感じられた。

「お会いできて嬉しいわ、リアンさん」
絹張りの長椅子に腰掛けるや、王妃は新任の政務次官に向かって気さくに

声をかけた。それからちらりとリアンの傍らに目を走らす。
「公爵…貴方もいらしたの。新年のお客様で忙しいでしょうに。
心配しなくても新任次官を苛めたりしませんよ」
その言葉で、キリルが王妃の非公式茶会に招待されていなかったこ
とを
リアンは知る。
（そういえばミルケーネ公爵…大貴族様のお屋敷って正月三が日の
間は
新年祝賀の来客がひっきりなしで、応対に多忙を極めるんじゃなか
った？）

神代の衣装も突然の非公式茶会のためではなく、公爵家参賀の返礼
用と考え
ればうなずける。どう見ても公爵の方が、王妃より豪華な装いだ。
王妃シャララは襟元までしっかり止まったブラウスと踝（くるぶし）まである長い
スカートというシンプルな出で立ち。
ただし、ブラウスには流行の花鳥文様手編みレースが胸元と袖に
たっぷりあしらわれ、ルビーのブローチがアクセントになっている。
「リアン・パルマローザ・アギール伯爵令嬢を王妃様に紹介するのに
上司である私が出向かないわけにはいかないでしょう」
（いや、誰も頼んでいないんですけど…）
しかし、グウタラ長官だと思っていたが、意外に面倒見が良いのか？
リアンは就任初日に行った、抜き打ちテスト、もとい、アンケートの
回答内容をおぼろに思い出した。長官の趣味は“全国各地の地酒収
集”。
（今度、就任挨拶と新年挨拶を兼ねて一本持参するか…）
自身はとりたてて酒飲みではないリアンである。
ただ、留学時代に入手した
美酒を若干手元に保存していた…それほど高価なものはないのだが。

その時、強い視線を感じてリアンは慌てて挨拶のために口を開いた。王妃の後ろで女官の一人が睨んでいる。言わずと知れたフローネである。

「この度、自治省政務次官を拝命しましたリアンと申します。
王妃様にお目にかかれて光栄に存じます。」

正直なところ、挨拶を済ませ、茶の一杯も飲み干したらさっさと執務室に
戻りたいのが本音なのだが。

王妃様は悪い方ではない。それどころか偉ぶらず、思いやりのある貴婦人の
ように見受けられる。その女官の方がよっぽど態度がデカかった。
しかし、新人次官のリアンはここでいつまでも油を売っている暇はないのだ。
明日から自治省の仕事が本格スタートしてしまうというのに！

王妃が手ずからいれた花茶を、リアンとキリルはご馳走になった。
貴人がふるまう名茶をいただけるのは臣下の誉れ。
茶会の正式な作法は一通り母ミアンに習ってはいた。
が、あまり興味もなかったので、リアンには今、自分が喫した花茶がどのような由緒のもとか皆目分からない。

隣のミルケーネ公爵、元王族出身の彼は一口で分かったが、
わざわざ部下に説明するようなことはしない。
ただ、その茶を王妃がリアンに出したという事実に一人満足していた。

「大層香り高い、美味しいお茶をありがとうございました。
私もここに心ばかりのものをお持ちいたしました」

（さぁ、ここからが一勝負）
リアンは持参した包みを解いて、青磁の小さな壺を卓の上に置いた。
「…田舎育ちゆえ、不調法をお許しください。わたくしが昔、母から学んだ
ことを間違って記憶していなければ、返礼として客も持参した茶を入れて
差し上げる習わしとか…お許しいただけましか」
「王妃様！外からの物を軽々に口にしてはなりませんわっ！」
たちまちフローネが血相を変えて、飛び出してきた。
早速、リアンを毒殺犯扱いだ。
「これは失礼しました。ご無礼をお許しください。それではこれは持ち帰ります」
（ま、当然だろうな…）
リアンは大人しく引き下がろうとした。

王家にとってアギール家の存在は苦々しいものだ。
何せリアンの父を追いかけた王女は若くして亡くなり、
リアンの母を追いかけた王子は生涯独身を貫く宣言をしている。

王女は現国王の姉にあたり、王子は弟にあたる。
国王陛下にあらせられては、お二人の間で気苦労が多かった
ことであろう。王妃様にあらせられても、また然り。

「折角、アギール伯令嬢が持参してくれたのだ。いただこうではないか」

ここが潮時と、御前を辞すために立ち上がったリアンを制止する声が響く。
王妃の座す背後の扉（恐らく別の隠し扉）から新たに現われた人物。
これほど近距離で対面することは初めてだが、ファネ国の者であれば

誰もが知るその姿。
ファネ国第１２代国王ソランサその人であった。
（何か王様まで出てきちゃったよ…）
青磁の壺を両手に持ったまま、リアンは深く頭（こうべ）を垂れた。
ソランサ王はミルケーネ公爵と身にまとう色彩がよく似ていた。
くせのない黒髪。キリルに比べるとぐっと短く切りそろえているが。
藍色の双眸。しかし、キリルに比べると少し、明るい色合いが。
御年４３歳。
ミルケーネ公爵が中年になったらこんな感じになるのかと想像して、
リアンは我に返る。恐れ多くも国王を長官と見比べてしまっていた。
「茶道具と湯沸しを次官殿に」
国王に命ぜられて、女官たちがリアンの前に道具類を並べ始める。
フローネだけは王妃の傍らを動かず、立ち尽くしていた。
相変わらず薄紫の瞳からは憎悪が溢れている。
自治省長官は部下の邪魔にならぬよう、席を立つや、やや斜め
後方に下がった。
彼の動きで、またも高貴な香がくゆったが、リアンは気づかない。
（この展開は予想していなかった…茶を喫す作法はともかく、点てる
作法は、随分さぼっていたからな…あんまり自信ない）
母上様ごめんなさい、口の中で謝りながら、リアンは茶壺の蓋に手を
かけた。
国王と王妃、元王子の公爵に母が王女という伯爵夫人。
これほど身分の高い方々に囲まれて、一挙一動を見つめられて、

茶を入れなければならぬというのは、ひどく緊張することだ。
湯の量、適温、茶葉の量、蒸らし時間。
最高のものを点てるためには、少しのミスも許されない
もっとも、リアンにとって有利な条件は、持参した茶があまり国内で出回っていないものだという点だ。
しかし、だからこそ最高の状態でお出ししたい、とも思う。

最初の碗に茶が注がれる。天上人に供する場合の作法。
まずは入れた本人が静かに飲み干す…害意のないことを示すために。

「では次の碗は私が」
2碗目をミルケーネ公爵がゆっくりと何口かにわけて飲み干す。
この場では彼がリアンの後見役だ。
次官が粗相をした場合、咎は上司である長官にもかかることになる。

「こちらからは私が検(あらた)めましょう…」
フッサール伯爵夫人フローネが動こうとしなかったため、
別の女官が3碗目を取った。
初老の婦人で、恐らく王妃付きの女官長であろう。

こうして3名が飲み終わったところで、茶葉と湯を新たにし、いよいよ
国王と王妃のための茶が点てられる。二人は同時に茶碗に口をつけた。

「これは…？一口目は苦く感じられるが、後味が甘い」
「異国のお茶でしょうか？初めて味わいました」
国王に次いで、王妃が感想を述べた。二人とも美味しい、とは言わない。

「西域リウムに産する苦茶（にが）というものです。毎日飲むのであれば緑茶や
紅茶が相応しいですが、たまに飲むのであればこのようなものも
よろしいかと。
独特の苦みと甘みが面白く、しかも、健康に良いと
言われております。
胃の腑が弱っている時や、御酒を召され過ぎた時などは特に…」
陛下の御代が長く平安に続きますように、とリアンは締めくくった。
背後からはキリルが彼女を暖かく見守っている。
リアンは気づかないが国王はミルケーネ公爵の気持ちを察していた。

「珍しい西方のお茶をありがとう」
王妃がお礼を述べ、リアンは受け礼をして、青磁の壺を初老の女官に
手渡した。

これにて無事茶会終了という、まさにその時…思いがけぬ国王の言葉が
新人次官の心を切り裂いた。
「父上と母上はお気の毒なことであった」

何を…
この御方は。この時機（タイミング）で何を仰せになるのか。
リアンはまだ片づけられていなかった急須を国王に向けて投げつけて
やりたくなった。
王は、知っていたのだ。当然か。地方都市にも王の耳や目がある。
“世紀のロマンス”と持て囃された超有名・駆け落ちカップルが
急死すれば、彼の元にも時をおかず知らせが届けられるであろう。
「2年前になるか…ご両親はルーマ市を襲った集中豪雨で亡くなっ

たと
　聞いている」
「…お気遣い痛みいります。
亡くなる時も二人、手を携えて共に逝ったので、不幸ではなかったと思います」
イサに留学中のリアンに突然舞い込んだ訃報。
急きょ帰国して両親の遺体を探しまわり、土石流の中に二人を見つけた時、
リアンの人生は大きく変わってしまった。
嵐の中で相当揉まれたであろうに、二人の手は死しても固く握られていた。

父クロスの懐中からはボロボロになった時計が出てきた。
時計の内蓋には「ごめん、リアン。愛しる」と小さく刻まれていた。

その後の数か月をルーマでどう過ごしたのかリアンはよく覚えていない。
救援部隊の中で働いていたはずだが、正直自分が役に立っていたのか分からない。

「では、私たちはこれにて」
リアンの心が現在と2年前を彷徨いはじめたのを傍らで察して、
キリルは急いで辞去の礼をした。
ぼんやりしたリアンの手を引き、部屋を出る。

フローネが追ってきた。
しかし、薄紫の瞳に浮かぶのは憎しみではなく戸惑い。
「二人とも…亡くなっていたの？」
キリルが代わりに頷いた。
王と王妃、公爵は知っていたことだが、伯爵夫人は知らなかった。

フローネはそれ以上何も言えず二人を見送った。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

気がつけば、リアンは自治省政務次官執務室に戻っていた。
何だか身体が暖かくて、心地よい。
王妃様に花茶をいただいたせいか。

「大丈夫か、リアン？」
え、と顔を上げれば目の前に藍色の瞳。
神代の衣装を纏った御方の両腕が背中に回されている。
暖かいのは体温が伝わるから…そこまで思い至ってギョッする。

（これって、長官に、だ、だ、抱きしめられているの、私？？）
どうやら帰りも地下通路を使い、
キリルに手を引かれて戻ってきたらしい。
そして、何がどうなって、この状況…リアンの心臓は早鐘を打った。

「長官、申し訳ありません、私、あのその、少し呆けてしまいました。」
慌てて身を離し、数歩後ずさる。
キリルは一瞬不満そうな顔をしたが、リアンを引き留めはしなかった。

「なんだか、茶会で思ったよりも緊張したみたいで
…思いがけず国王陛下もお出ましになりましたし。
本当にご迷惑をおかけしました」
「もう大丈夫…？」
「大丈夫です。いつも通り元気です…どうぞ公爵邸にお戻りを。
貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございました」

長官と二人きりといいうのは何故か心臓に悪い。
グウタラ上司で構わないから早く、屋敷に帰って欲しい、
リアンは切に切にそう願った。

しかし、キリルは自分のペースを崩さない。
「フローネに目をつけられたようだね」
「…あの方が、私を毛嫌いするのは分かります」

リアンは一つ気になっていたことを長官に尋ねてみた。
「あの、長官。フローネ様はご家族の方とは…うまくいってないのですか？」
白絹の両手が伸びてきて、リアンの頬を包む。
答える代わりに触れさせろ…というわけではないだろうが、
吐息が感じられる近さに、本当に本当にリアンは困ってしまう。
先ほどはするりと抜け出せたのに、今はなぜか動けない。

「フローネの母リウカが早くに亡くなったことは聞き及んでいるだろう。
　父君にあたるアジヤ侯爵は…悪い方ではないよ。
フローネのことを気にかけている。
ただし、フローネにとって母親違いで同い年の弟がいるというのは許せないことなのだろうね。
夫君のフッサール伯は、ちょっと歳が離れているけれど、温厚な人物だ。
王都ではなく、ご領地で過ごされることが多いが」
つまりは王都で暮らす夫人とは別居中。

（“私たちは”仲良し家族なので）（“貴女たち”の家族と違って…）
リアンが意図せず口にした言葉は、

フローネにとって猛毒となってしまったようだ。
彼女の蒼白の顔が思い出される。
「彼女が気になる？」
「仕掛けてきたのはあちらですが、私も酷いことを言ってしまいました」
「私のことは気にならない？」
「はぁ…？」
キリルの顔が更に迫ってきた。
（近い、近い、近い…またもセクハラですか、パワハラですか）
「今度、釣り書き持ってくるからしっかり目を通すように」
「釣り書き？」
「間違った。個人調書。自分の上司のことくらいしっかり把握しておきなさい」
額に微かに触れる唇。固まるリアン。
よろしくね、と綺麗に微笑んで、自治省長官はリアンの部屋を出て行った。

第二章　自治省の美貌小姑　その２（後書き）

”世紀のカップル”実は…の展開で申し訳ない。
しかし二人は幸せでしたよ、間違いなく。

次章、リアンの叔父クロン認定・要注意人物その２が登場します。
キリルとその人物の間で大舌戦が繰り広げられる…予定。

第三章　自治省の爆弾親王　その１（前書き）

自治省の新人政務次官として頑張るリアン。

その仕事模様を少しばかり皆さまにご紹介いたします。

長官の意外な？面も次々登場。

第三章　自治省の爆弾親王　その１

官庁仕事始から半月をリアンは怒涛のように過ごした。
まず手がけたのは、少しばかりの省内人事異動。
伯爵令嬢だろうが“世紀のロマンス”の娘だろうが、田舎者の新人。
いきなり自治省のナンバー２にそんな奴がきて、ぎゃあぎゃあ騒げば反発必至。
…さりとて波風立てず「お飾り」をやっているのは性に合わない。
鬼女と言われようが魔女と言われようが、構うものか。

誰の、何の、思惑で自治省政務次官なんて高官職に就くことになったのか
分からないが…せいぜい利用させてもらう。
私はここでやりたいことがあるのだから。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

自治省政務次官室はここ半月の内に随分と手狭になった。
最上階にある長官室ほどではないものの、３階にある次官室にはかなりの
空間（スペース）が確保されていたのだが。

今はリアン自身と補佐官であるヴァンサランが使うもののほかに、
８人分の長机が運びこまれている。
リアンの席に一番近いところにヴァンサラン用の机が置かれ、
あとの８人分は省内の各部署から抜擢した役人たちのものだ。
ファネ１６州を一人当たり正（メイン）で２州、副（サブ）で２州ずつ担当して
もらい、政務次官に上がってくる決裁書類を精査させる。

普通ならば、長官や次官に上がってくる決裁書類の類は
ほとんど右から左に署名・押印して流してゆくようなものだが、
リアンは自分の分からないことに形ばかりの承認を与えるのが
嫌だった。

一通り目を通して、「何かオカシイ」と経験と本能が告げる所を
各担当官に再度秘密裏に調査してもらうことにする。
そうしてみると。
幾ら比較的潤沢な予算が配されているといっても、
使い方間違っていません？という新人次官でも分かる陥穽が
ざっくざっく見つかった。

「…サラン、この前のソイ州の官舎建設の件、却下」
「現地を仕切っているカリム大臣に睨まれるぞ」
「だっておかしいでしょう。何で中央から派遣される役人のためだけに
豪華官舎を造営しなきゃいけないの」
中央から地方に派遣される役人はかなりの高給取りなのだから自分で
家を借りるなり買うなりできるはずだ。
お偉い大臣が怖くてこの仕事できるか、とリアンは補佐官の警告を
一蹴する。

ヴァンサランは、「だ、そうだ」と言って、
それ以上は上司と争わず、ソイ州担当官サナンに向けて
不可となった書類を紙飛行機にして飛ばした。

「次官殿…国民リゾート村の件は…？」
トマス州担当官のアイルと副官のフェイがおずおずと
お伺いを立てる。
二人ともやや太めの、いい歳をした中年おやじなのだが、

リアンを見る目は子犬が子羊のようだ。
もとより次官付の上級官吏でそれなりに経験を積んでいるのだが
年の暮れにリアンに鬼のように叱り飛ばされて以来、本気で彼女を
怖がっている。

ちなみにこの二人以外の次官付は全員交代となった。
理由は簡単。ファネ国１６州が書けなかった連中だ。
もちろん頭は空っぽでも、権力者や有力商人の縁故であったりして、
それなりに省内に留めておく価値のある者もいるにはいたが。
自分の頭脳（ブレーン）としては不要と、リアンは“丁重に”配置変えを乞うた。

（なんで南海岸ヴァカンス村作るのに自治省が金を出すんだ…！）
トマス州から寄せられた企画書と嘆願書を見せられた時、
新人政務次官は頭に血が上るのを感じたが、一応二人の話を聞いた。

結果、
「その件、来月まで保留。２週間以内にもう一回企画書を提出させて」
となる。

聞けば昨年発生したハリケーンの影響で南部４州の内、トマス州と
エンジル州に深刻な被害が出たそうだ。

現地の新たな雇用創出と観光産業復興という目的を考えれば、
国民リゾート村の発想自体は悪くない…が何か胡散臭くもある。

「アイル、計画実施の場合に関わってきそうな建設関係者を洗い
　出して。フェイ、昨年のハリケーン被害報告書を持ってきて」
わたわたとトマス州担当官と担当副官は執務室を出ていった。

少し太めの二人だが、数か月後は見違えるほど精悍になるだろう
…ヴァンサランは近未来を正確に予測した。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

お昼を回ったところで、政務次官室にはしばしの間
リアンだけが残された。
ヴァンサランを含めた９名には食堂で昼食を取らせ、
１時間ばかり休憩させる。

リアンだけはアギール家から届けられた弁当をその場でつつく。
そうしながら、
読み終わらない企画書やら要望書やら嘆願書に目を通していく。

ふと傍らを見やれば、書類の山の一番上に見慣れない絹張り表紙。
いつの間に置かれたものだろうか。
リアンは読みかけの企画書から目を離し、その綴りを手にとった。

藍色の絹地に銀糸で刺繍されているのは＜自治省政務長官個人調書＞。

何か読みたくない～とヤサグレつつ、少しばかりの好奇心に負けて
絹張りの表紙をめくる。
「キリル・ヒョウセツ・ミルケーネ
ファネ暦×××年１１の月３の日生まれ。
ファネ国第１０代国王イランサと王妃イルーネを両親とする。
第１１代国王キランサの異母弟。
第１２代国王（現国王）ソランサの叔父。
成人後、ミルケーネ公爵を襲名すうことにより臣籍に下る。
現・自治省長官」

…ここまではどうということのない履歴書（プロフィール）だ。問題はそこから先。

「ファネ国第１０代国王イランサは生涯において４度婚姻。
最初の王妃ソラリヤは一子（第１１代国王キランサ）の生誕と同時に逝去。
二番目の王妃リリスは暗殺により、三番目の王妃カーラは事故により逝去。
四番目の王妃イルーネは、太王太后として御存命、現王室では最長老。」
…王様四十代なのに、叔父のキリルがずっと若くて三十前というのはこういうことか。

二代前、第１０代国王の御世、ファネ国政情は荒れていて周辺との国境紛争も
深刻であったと聞く。
王妃さまがお産で亡くなったり、暗殺されたり、事故死したり、
これだけ不幸が続くと何かあったのかと勘繰りたくなる。

しかし、長官、私にこれを読ます意図はなんだ…？

個人調書にはまだ続きがあった。
「趣味　旅行（温泉、地酒、郷土料理、祭り…）
　　読書（歴史、数学、天文学　…）
特技　８カ国語　剣術　棒術　乗馬　星占術　…　）　」

だめだ、長官、アギール公爵、アンタの常識は訳ワカラナイ。
最初の１枚目はともかく、２枚目以降はどう考えても人事で管理している
調書ではない。
はっきり言って、長官の趣味も特技もリアンにはどうでもよい。

しかも、その後に、なぜか「これから行ってみたい場所」とか
「やってみたい事」とかが、それはもう長々と書きつらねてある。

（一体、何の嫌がらせだ、長官…っ）
思わず拳(こぶし)を握りしめたら、変な風にスプーンが曲がってしまった。
おじいちゃんごめんなさい、家紋入りの銀匙を一つダメにしていまし
しました。
リアンは心の中でアギール伯ハリドに詫びた。

「長官から、今日は一回も次官に会っていないねー、と言われたよ」
とにかく、極力、全力でキリルには会わないようにしよう。
そう決意を新たにしたリアンに、お昼から戻ってきたヴァンサランが
無情にも告げた。

彼に押し付けようとしていた長官決裁の書類が宙に浮く。

「それ、自分で持って行ったほうがいいと思うぜ」
補佐官が顎をしゃくって、リアンを促す。
全く、上官に対する態度としてなっていないが、ヴァンサランは
誰に対してもぞんざいな口を聞く。
たぶん…彼が主(あるじ)と認める男以外には。

ううっ、小さく呻いて政務次官は立ちあがる。
決裁書類を挟みこんだファイルを小脇に抱え、それから縦長の紙袋
を一つ
反対の手に持つ。
紙袋の中身はずっと渡そうとしていて、そのままにしていたものだ。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

「やあ、リアン。待っていたよ」
自治省長官はやたらに分厚い革張りの書物から顔を上げて次官を迎えた。

どうみても省内書類ではない…何かの歴史物？
リアンの頭に（趣味、読書、歴史ほか）という調書の中身がちらりと点滅した。相変わらず仕事する気のないグウタラ長官だ。

「こちらの書類に署名と印をいただけますか」
卓の上に、要領よく持参した紙束を並べてゆく。

「私の個人調書には目を通してもらえたかな」
キリルはペンを取って、さらさらと署名しながら（いつものことだが中身を
どの程度見ているのか、かなり怪しい）、尋ねてきた。

「それなんですが、部下の私が見てよい内容だったのかどうか。
かなり長官の個人情報が特記されているようなのですが」
何のつもりよアレは、と怒鳴りたいのをこらえ、しごく真面目な顔を作る。
思い出すつもりはないのに、記述内容が頭の中に甦ってくる。

その冒頭は。
“キリル・ヒョウセツ・ミルケーネ
ファネ暦×××年１１の月３の日生まれ”
「あれ…？」
「…ん？」
頭の中に浮かんだ数字が意外な現実を突きつける。
リアンが上げた声にキリルもペンを止めて彼女を見た。

「長官って、まだ２５歳だったんですか…年下？」
いくら王族出身でも中央官庁の長官という重職であれば３０歳近くには
なっていると勝手に考えていたのだが。
「…年下は嫌い？」
キリルの手がすっと伸びてきたが、“想定内”とリアンは上手く避けた。
長官の“傾向と対策”を日々学習する次官である。
書類と一緒に持参した紙袋からガサコソ何やら出して
卓の上にでんと載せる。

「長官に貢物です」
「貢物？」
「遅ればせながら、就任のご挨拶と新任のご挨拶その他諸々（もろもろ）を合わせ
　まして…全国地酒収集もご趣味だと伺っているので」
何せ自治省アンケート９８％の回答結果だ。

「それはまぁ…ご丁寧に」
自治省長官は瓶のラベルを確かめながら、皮肉げに言った。
どうやらお酒の贈り物はあまり喜ばれなかったらしい。

「でもショウコ酒のストックならもうあるよ」
「ええ？ファネ国ではまだ珍しいものと思いましたが」
「私の収集物（コレクション）を甘くみないでほしいな、次官。
　趣味は旅行と書いてあっただろう。
　隣国イサには私も足を運んだことがある」
「公爵さまが隣国までですか？それは初耳です」

そう言うとキリルの機嫌はなぜか一段と悪くなった。
このままだと長官決裁書類にハンコを押してもらえない。
あの高価そうな翡翠の角印はどこだ。

リアンは目を泳がせつつ、紙袋から奥の手を出した。
「ではこちらを差し上げます。
絶対、長官のコレクションにはないものです」
ショウコ酒の横に並べたのはラベルのない陶器の壺。
「これは…？」
「ワタクシが造りました自家製ウメエ酒3年物です」
「ウメエ酒？」
「極東の帝国の更に東に小さい島国があるとか。
そこで採れる果実を蒸留酒に漬け込んで造ったものです」
「その果実というのは何処で？」
「イサ留学中に王立植物園で臨時雇い（バイト）したことがあって、
そこで
試験的に栽培しているものを少々分けてもらったんです」
ちなみにお酒には白砂糖ではなく黒砂糖を使っていて
我ながら惚れ惚れする出来具合の…と本来の目的を忘れて滔々と説明
していると、長官はいつの間にやら固まっていた。

「…長官？」
まずい、また失敗か。
高貴な御方は庶民の造った果実酒など召されないか。

「へえ、君は、留学中にそんなものを造っていたのか」
気づけば、怒り半分、呆れ半分の藍色の双眸を向けられていた。

「…州費留学生で、臨時雇い（バイト）？自家製果実酒造り？
そんな理由で私の誘いを断っていたのか」

後半は意味不明だが、リアンは自分が失言したのに気づく。
しまった、州から研究課題として与えられていた「外交」と「地方行政」の勉強を疎かにしたことはなかったが、留学中イロイロ楽しんでいたのがバレてしまったか。

「え～と長官、ウメエ酒は冬場だとお湯に割って飲むと美味しいですよ。
健康にも良いですし」
「君の健康志向はどうでもいいよっ！」
ああ綺麗な手で卓を叩いたよ、このヒト。なんかもう面倒くさい。

「…お気に召さないようですので、この2本は持って帰ります。
今度、自宅で叔父と酒盛りでもします」
書類はあとでヴァンサランを寄越すんで、と付け足して次官は逃げることに決めた。９８％の回答率もアテにならんな。

「まて、2本とも置いていけ。それか押印するまで待ってろ」
キリルの口調が乱暴になっている。
大貴族さまの余裕もどこへやら、苛立ちが表情に出てしまっています。

「…ご迷惑では？」
「シャイン子爵と酒盛りする位なら、私と飲もう」
「長官、省内で飲酒はダメだと思います」
「…長官である私が許可する」
どこの暴君ですか貴方は、と抗議しかけて、突然降って湧いた爆笑に遮られる。

振り向けば無精髭をはやした軍人が一人立っていた。
短く切りそろえた黒髪は櫛を入れるのは忘れたようにボサボサ。

上着の前ボタンを開けていて、中から見えるシャツには皺が寄っている。
その人はお腹を抱え、目に涙を浮かべたて笑い転げていた。

誰だ、この不良オヤジは。
リアンは取りあえず相手が回復するのを辛抱強くまった。
けれど、求めていた答えは背後の長官からなされた。
「また突然のご訪問ですね…ワグナ殿下」

ああ、今日は厄日だと、自治省政務次官はこっそり嘆息する。
現国王の弟王子ベリル。通称ワグナ殿下。ファネ王国軍総大将。
そして、母ミアンを追いかけ回した迷惑王子。
（…ついに出たな、要注意人物その２）

第三章　自治省の爆弾親王　その１（後書き）

リアンの自家製ウエメ酒。きっと美味しいですよ。
私も自家製梅酒で温まってからひと眠りすることにします。

ついに正式登場ワグナ殿下。
キリルにとっては現国王同様、甥にあたる人物です。

二人の舌戦、次回になってしまいました、お許しを。

第三章　自治省の爆弾親王　その２　（前書き）

リアン。
君はもう少し伯爵令嬢としての慎みを身につけてくれ。
地方役人として培った処世術を中央でも生かしてくれ。
売られたケンカを買ってばかりいたら、死なないまでも
これからの人生どんどん厳しくなってしまうよ～！

第三章　自治省の爆弾親王　その2

リアンの叔父、シャイン子爵クロンは王弟をこう評した。
（端的に述べると、腹黒い、嫌味、陰険、狡猾、という感じかな）
そして要注意人物その1指定のフッサール伯爵夫人フローネ
にしたような甘い弁護（フォロー）は一切しなかった。

クロンの全身からアギル殿下に対する嫌悪がダダ漏れする。
（とにかく、かなり壊れている奴でいろいろ危ないオッサンだ。
性質（たち）の悪い変態おやじだ。遭遇しそうになったら全力で逃げろ）
最後に、王族なんてロクな奴いねぇ、とボソボソを悪態ついていた。
アギール伯爵次男であり、シャイン子爵を襲名しながらも
その王室に対する不敬罪とも取れる言動には理由がある。

なにせ“世紀のロマンス”カップルの駆け落ち婚を幇助して以来、
アギール家一門は王族から苛められ続けてきたのだ。
さすがに、纏まりかけていた伯爵令息と子爵令嬢の成婚に
横槍を入れたのは王家側だったので、表立っての
公職追放や爵位剥奪は行われなかった。

しかし、王家からの冷遇と王家に阿（おもね）る貴族からの嘲笑（イビリ）は
長く続いた。
権謀術数に長けた老獪なアギール伯爵はともかく、
まだ若かったシャイン子爵への風当たりは相当に厳しいものとなった。

叔父の性格が…少しばかりヤサグレてしまったのも致し方ないこと
なのかもしれない。両親のせいで、と申し訳なくも思う。
王族なんてヤダヤダと呟くクロンに、リアンは同情を禁じえなかっ

た。

「お前がクロスの娘か。いきなり自治省政務次官とはご大層なことだな」

笑うのを…いや、嗤うのをやめた男はリアンに近付くと、馬鹿にするような調子で口火を切った。

藍色の瞳がリアンを見下す。

長官と同じ色の瞳。

けれどもずっと鋭くて、威圧的な、

恐らくは人の命…それも多くの…を奪ったことのある者の瞳。

キリルの瞳には謎があるが、それでも優しさがあった。

国王の瞳には為政者に相応しい理知的な明るさがあった。

でも同じ藍でもこの人は…“囚われてしまっている”

…でも今更、何に？お父様もお母様ももういないのに。

「ワグナ殿下でいらっしゃいますね。お初にお目にかかります。クロンとミアンの娘でリアンと申します」

（全力で逃げろ…）

叔父の忠告と自分の本能はそう叫んでいた。

でも、この男から逃げてはダメだ、後ろを見せてはダメだ、弱みを見せてはダメだ…正面から対峙しなくては。

新人の政務次官として丁寧に挨拶し、深く頭を下げる。

しかし次の瞬間顔を上げるや、リアンはファネ国軍総大将を

正面から睨みつけた。

心穏やかな時、黄緑の瞳は春の若草のよう。
見る者の心を暖かくする。
しかし今は、春の嵐を巻き起こして。
見る者の心をざわめかせ、翻弄する。

キリルはその瞳に息をのむ。いつかも見たその真剣な眼差し。
彼はベリルを制止しなければと思いつつ、
もうしばらくリアンを見つめていたいと欲を出す。

ベリルは同じ瞳を持つ、「あの人」を思い出した。
「あの人」は優しいそよ風のよう。初夏の清水のよう。

けれども。
これほど生命が迸(ほとばし)るような強い瞳を自分に向けたことはない。

「…小生意気な娘だ」
「中央官庁には新人や若者イジメが趣味のジジイやオヤジ連中が跋扈(ばっこ)していると聞き及んでいます。
図太くないと生き残り（サバイバル）できませんからね」
わっはっはと、できるだけ豪快に笑ってやった。

長官ごめんなさい、こんな無礼な部下で、でも就任一カ月で免職(クビ)は勘弁してください。内心で上司に手を合わせる。

「口の減らない奴だ。育ちが悪いせいか」
王弟は乱暴にリアンの纏め髪を掴み上げると、乱暴に引っ張った。
金茶の髪がばらばらに解け、背中に広がる。

「私の部下に手荒な真似はやめてください」
慌ててキリルが机から飛び出すと、ベリルの腕を払った。

「汚らしい髪の色だ。冬の氷水で色を落としてしまえ」
「氷水で濯(すす)いでも、白銀(プラチナ)にはなりませんよ。申し訳ありませんが」
「切れ、染めろ、鬘(かつら)にしろっ！」
激昂しているのは、王子の方で。リアンの声は冷静だった。

「両親譲りの外見を偽るつもりはありません。
私が“あのアギール家”の者であることは入省初日にして
知れ渡っておりますし」
「随分反抗的な態度だな。国軍総大将(トップ)の不興を買って、
自治省政務次官が長く勤まると思うなよ」

…ベリルの言葉はただの脅しではない。
リアンはそれを正しく理解していた。
他省も似たり寄ったりだが、自治省は立場上、王国軍に強い態度に
出られない。

国境紛争、破壊活動(テロ)、自然災害などが１６州で生じた時、
もちろん州府の役人や州警察、州軍がいち早く動くわけではあるが、
それだけで事態が収束しない場合は王国軍の出動となる。

州府からの要請をうけ、自治省と王国軍が連携して円滑に
動かないと被害が拡大する…つまりこのような場合、自治省は
国軍に頭を下げる立場になるのだ。

「自治省の小娘が気に食わぬからと、総大将(トップ)が国軍の仕事に
手を　抜くとは思えませんが。
それとも…貴方は個人的な意趣返しのために、罪もない人を

大勢巻きこんで見殺しにするような方ですか？」
自分はけっして好戦的な人物ではないと思っているが。
それどころか平凡な生活をこよなく愛する小市民だと思っているが。
なぜかやっている事は、王国で一番偉い軍人に…喧嘩売っている？

もしかして、国軍訊問室に軟禁か、はたまた国軍地下室に監禁か。
おじいちゃん、国軍まで差し入れよろしく。ひもじいのは嫌だ。
リアンは1時間後に待ち受ける自分の運命をぼうやり想像した。

「王族に対しても国軍に対しても不敬を働く女だな。
礼儀を弁(わきま)えぬ者には躾(しつけ)が必要だ」
しかし、軟禁監禁以前に拳が出る男だったらしい。
ベリルの左腕がリアンの頬を張るために振り上げられた。

その時。
「止めてください」
キリルはリアンを背後から包み込むと、ベリルの左手を振り払って
素早く後退した。白絹の手の甲が朱に染まるのをリアンは見た。

「私のリアンに危害を加えることは許しませんよ」

私の部下。私のリアン。
長官、同じ意味で言っているのでしょうが、
それ、使用法違いますから。
リアンは公爵サマに背後から抱きすくめられたまま動けなかった。
この人は上司だから、年下だから、どうか変に緊張しませんように、
顔が紅くなりませんように、と心の中で呪文を唱え続ける。
何でだか、リアンにとって、王弟殿下とのガチンコ対決より、

公爵閣下に優しく搦めとられることの方が心臓に悪い。
リアンの頭ごしでミルケーネ公爵は眉をひそめた。
相手が、政務次官に対して、それでも手加減しているのは
分かっていた。利き腕を使わず、しかも平手だ。
彼が本気を出せば拳一つで相手を死に追いやれることを知っている。
キリルは、実際に自分の甥がそうして敵を地獄送りにする様を何度も
目にしてきた。ベリルは嬉々として殺る時は殺る。

「ワグナ殿下、私の執務室に勝手に入ってきたのは貴方の方ですよ」
「…最初に無礼を働いたのは私だと仰りたいわけですか」
ベリルは敬語を用いた。しかし微塵も敬意が籠められていない。
彼が自分よりずっと年下の叔父をどう見ているか、これで明らかだ。

「貴女も悪いのですよ、リアン。王弟殿下に対して何という態度で
す。
　謝罪なさい」

そう耳元で囁くように叱ってくる。
リアンにはまだワグナ殿下に対する反抗心がたっぷり残っていたが、
長官の諌めには逆らう気持ちが起きなかった。
リアンとベリルの諍いを何とか収めようとするキリルの心遣いが
伝わってきたから。

「…申し訳ございません、ベリル殿下」
よくできましたと、
優しい手がリアンの乱れた髪を何度も撫でて整えてくれた。
ベリルはリアンの瞳を睨みつけたまま口を引き結んだ。

それで私はこの後どうすれば…？
全力で逃げるという選択肢を再考しつつ、次官は時機（タイミング）を伺った。

「少しお待ちなさい」
離れる時に一瞬だけ。
何か柔らかくて暖かいものが頭に押し付けられた気がしたが…
よく分からない内に、見れば長官は自分で卓まで戻っていた。

リアンが持ってきた書類をざっざっと卓の端から端までに並べると、
ぺぺんと連続技で印を押してゆく。あっという間の早業だ。
もちろん中身を確認している様子はない。

「これを下の連中に持っていきなさい」
「畏まりました、長官」
「私は、しばらくワグナ殿下と会談しますからここには誰も近付け
させないように…分かりましたね？」
「仰せの通りに」
リアンはキリルに頭を下げると決裁書類を受け取って部屋を出た。
途中、ベリルの前を通り過ぎる時、無視してやろうかと思ったが、
上司を立てて敬礼することにした。
大人の対応というヤツだ。

階下に向かう踊り場のところで、一度だけリアンは振り返った。
扉の向こう。突然現れて爆弾を投下した軍人の姿はもう見えない。

（あれがワグナ殿下）
途端に心の中でいろいろな感情が渦巻いて、無意識に胸を押さえる。

叔父の忠告がある。

けれどもそれよりずっと前に…母ミアンが生前に告げた言葉が甦る。

「ベリル王子。この名を覚えておきなさい。
ワグナ殿下とも呼ばれる方です」
「王弟殿下でしょう？…名前くらいは知ってるよ」

リアンが隣国イサに留学する少し前のことであったか。
父クロンは出張で家を空けていた。
結婚して２０年以上経っても熱愛夫婦で、父は母の傍らを
離れることを嫌がったが、ごくまれに止むを得ず一日二日ばかり
留守にすることがあった。そんなある時。

母は鏡台の前でリアンの髪を梳いてやりながら、
ある貴人の名前を告げた。

「クロスとミアンの娘である貴女を…あの方は憎むかもしれない。
あなたの幸せや自由を壊そうとするかもしれない」

その時まだリアンは地方都市暮らしで、自分を庶民と信じていて、
自分の親が“世紀のロマンス”カップルであることを知らなかった。
当然ミアンとベリルの拗(こじ)れた関係についても思い至らない。

「母さん？何だか王子って怖そうな人に聞こえるけど？」
どのみち王族に会うなんてことなんて早々ないし、とリアンは
鏡の中の母親に笑ってみせた。

「そうね、お目にかかる機会なんて、滅多にないものね。
でも…もし、もしもよ、クロンも私もいなくて、貴女が一人で
王都に行かなければならないことになったら覚えておきなさい」
「母さん？」

「覚えておきなさい。ベリルは貴女の心は守ってくれない。
でも、貴女の命はきっと守ってくれるでしょう」

お母様…私はここまで辿り着きました。
寂しい眼をした不良中年にお会いしましたよ。

リアンは3秒だけ亡き人に黙とうを捧げ、
それから頭を振って自治省次官としての自分に戻った。

第三章　自治省の爆弾親王　その２　（後書き）

この章はもう一話続きます。

リアンの母ミアンとベリル王子が拗れる前の関係はどうだったのか、
など
ちらりちらりと出てきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9340z/

自治省の悪臣

2012年1月4日01時47分発行